



「次の30年を代表する企業になれ」

世界を知る投資家・阿部修平は、なぜワコムに熱視線を注ぐのか

ジョージ・ソロスの薫陶を受け、数えきれないほどの経営者と企業を見てきたスパークス・アセット・マネジメント代表取締役社長CEO 阿部修平の目に、今のワコムはどのように映っているのか。ワコムに向けられる温かくも厳しい言葉の端々からは、「世界のトップと伍する企業へと成長できる」という期待が感じられた。



ビジネスにおける「アート」の意味

井出 信孝 今日は「Wacom Story Book (以下ストーリーブック)」のためにお越しいただき、ありがとうございます。阿部さんとお話できるのをとても楽しみにしていました。このストーリーブックは、今年から新たに始めた取り組みです。ステークホルダーとのコミュニケーションツールとするにあたり、「ワコムのデジタルペンを使っていただいているお客様、価値を共創しているパートナーの方々、一人ひとりのチームメンバーが紡ぐ無数の物語を伝えたい」という願いを含め、ストーリーブックというタイトルを付けました。投資家や株主様に読んでもらいたいという気持ちと同じくらい、自分たちでもこの物語を読みたい。そして、ワコムで働くチームメンバーが誇りを持って自分の会社や仕事について語る時、そこにストーリーブックがあってほしい。そう思っています。

阿部 修平 私がわずか5人で独立した時、仲間にもかかわらず大企業から名も知れない小さな会社に転職したことを気恥ずかしく思う人もいました。それ以来、私は「家族や友人に自慢できる会社になりたい」と言い続けてきました。「誇りを持てる会社で働きたい」という想いは、日本でも海外でも変わりませんね。

井出 情熱を持って仕事に取り組む個人の集積が、企業として大きな価値を生み出す。そのためには何が求められるのか。今日はそのあたりをぜひお伺いできればと思います。最初にお話したいのが、ビジネスにおける「アート」の意味についてです。企業経営では設定したゴールに向かって最短距離で進む効率性や生産性が求められます。これは社会で存在するために必要

SPECIAL

CONVERSATION





な要素ですが、一方で、一見すると無駄とも映りかねない感覚的要素、アートの部分が大きな意味を持つのではないかという意識も持ち続けています。

阿部 私は投資家として、多くの経営者の話を聴いてきたという点では誰にも負けないと自負しています。投資家として企業を見る判断軸は、効率性や生産性などよりも、極めて感覚的な部分が大きい。投資家に必要なのは「価値を見極める力」です。他人には見えない価値を見つけること。何かを見て「綺麗だな」と感じる感覚と同じです。アーティストであれば個人的感覚を作品として表現するでしょう。それはビジネスにも通じますよね。ワコムで言えば、「道具をつくる」というロジックに、いかにアーティスト的な気付きを組み合わせるかということですよね。伝説的投資家であるウォーレ

ン・バフェットさんも、自らをビジネスマンであり、投資家であり、アーティストであると言っています。

井出 阿部さんもスパークス・グループを経営するビジネスマンであり、もちろん投資家でもあり、ご自身でも音楽や絵画などのクリエイションも行われるアーティストでもいらっしゃいますよね。

阿部 「直感」はとても大切です。私が高校生の頃、『Let It Be』という映画がありました。ビートルズの4人がスタジオに籠り、段々と音をつくっていく様子を追ったドキュメンタリーです。それぞれのアーティストが直感に従いながら、それぞれに敬意を払って、徐々に形になっていく。あの4人でなければできないことです。

井出 『Let It Be』を見ても「創作の過程が持つ価値」を感じます。なぜあのコード進行に行き着いたのか。何かを生み出すまでの苦しみにこそ、「表現の真の価値」が宿るのではないのでしょうか。いまワコムで進んでいる「KISEKI ART」(⇒P48_「KISEKI ART」について)というプロジェクトは、まさに「創作の過程」に焦点を当てています。創作の成果である作品だけでなく、創作の過程そのものもアートであるという新しい問いかけです。これにより、過程が価値を持ち、その対価をクリエイターやアーティストに還元することができれば、創作に関わる層の拡大につながる。その信念を持って取り組んでいます。

阿部 そこから新しいビジネスが生まれるのではないのでしょうか。私が証券アナリストになりたての頃、ワープロが普及し始めました。これによって起こったのが「小説家の若返り」でした。大学生などの若者が名だたる文学賞を獲得し始めた。つまり、新しい道具の登場がクリエイティブな活動を進化させたわけです。その面からも、私はワコムに興味を持っているのです。ワコムのデジタルペンには「言語の壁」がありませんよね。そして、同じ場所になくても創作を共有できます。言語の制約も空間的な制約も受けない、知的創造力を変質させる道具が生まれると期待しています。

井出 デジタルテクノロジーの最大の特徴は「時空を超える」ことです。時間と空間の制約を取り払うことがワコムの使命だと思っています。

これからの30年に不可欠な
「人々を幸せにする」という視点

阿部 優秀なビジネスマンはプラグマティック(実利的)です。「未来」を見つつ、「今」やるべきことがわかっている。10年後のことを嬉々として語り、資金調達の相談に来る経営者もいますが、そういう人に限って実態は赤字続きということもあります。経営者としての賢さがあれば、今でも利益を出すことができるはず。一生懸命であり、小さな工夫を凝らすこと。これが大切ですね。

井出 よくわかります。『千夜一夜物語(アラビアンナイト)』では、シャフリヤール王に殺められないよう、妻であるシェヘラザードが毎晩命懸けで物語を語ります。王は妻を亡き者にしたい一方で、物語の続きを聞いた

いがために妻を翌晩まで生かすしかない。その切迫感のある毎日の積み重ねが、結果的に千日間の壮大な物語につながったわけです。最初から千日後に面白い話をすると約束するのではなく、振り返ると千日間の物語になっていたんですね。これはビジネスでも同じことが言えると思ったのです。千日後の物語を語るには、今日この一日の物語を語れなければならない。ある種の切迫感を伴った「今」が、「未来」につながっていくのではないかと思います。

阿部 ビジネスとアートの間に境界線があるとしたら、「今があるか?」という点かもしれません。「今」を生き抜く現実主義的な面。それと同時に、先を見据えた使命感も持っていたい。使命感がなければ、単なる利益追求になってしまいます。外から見たら成功しているように見えても、自分の得や利益のためにだけビジネスをやっている人々をたくさん見てきましたから。

井出 その部分をもっと深くお聞きしたいです。阿部さんは30年以上にわたり、謂わば「資本主義の中心地」で生き抜いて来られました。資本主義の真髄を知りながら、個人としてクリエイションに真剣に取り組んでいるのは、どのような関係性があるのでしょうか。

阿部 それは私たちも懸命に考え続けているテーマです。学究的ではありませんが、少なくともこの30年間のことは語ることができる。私が思うのは、やはり「歴史は繰り返す」ということ。資本主義が変わると言われていますが、世の中というものは本質に向かうものです。およそ30年前、テクノロジーの進化によって世界がひとつになりました。いわゆるグローバル化の進展です。これによりスケールからクオリティ



へと判断軸が変化しました。では、次に何が起こるでしょうか。直近30年はデフレーション、つまりモノやサービスの価格が下がる時代でした。価格が下がるから多く売らなければいけなかった。これからの30年は、「量」に対して「価値」が重視される時代へと移っていくでしょう。さらに言えば、「利潤」よりも「人間性」が大切になると考えています。「人々を幸せにする」という視点、「プロフィット・トゥ・ヒューマニティ」ですね。

井出 やはり阿部さんとワコムにはレゾナンス(共鳴)があると感じます。ワコムでは「意味深い成長(Meaningful Growth)」というコンセプトを立ち上げました。財務的な成長の最大化はもちろん目指しますが、あわせて、「人間の成長に寄与したい」という想いから生まれた考え方です。ワコムに関わるすべての人

新しい道具の登場が

クリエイティブを進化させる。

だからワコムに興味があるのです。



たちが、自分にとっての意味深い成長を遂げる。そのためにワコムが伴走するという挑戦です。

阿部 私も共感します。ワコムのように、世界のトップを狙える潜在能力を持った会社には、自らの限界を設定することなく、ぜひ積極的に多くの人々に製品やサービスを届けてもらいたいですね。

ワコムに抱いてもらいたい 「世界を変える」という野望

阿部 私は若い頃、天才投資家として知られるジョージ・ソロスさんと知遇を得て、およそ3年間、彼の傍について投資に関する理論や信念を学びました。彼はハンガリー系ユダヤ人で、16歳の時に英国に渡りました。第二次世界大戦が終結した直後のことです。彼が1992年に行ったのが巨額のポンド売りでした。当時の英国は経済成長が後退する一方で、英国政府は効果的な金融政策を打ち出せずにいました。英国政府はポンド下落を食い止めるために一時買い支えましたが、断念するに至りました。英国経済は、結果的にこの「ポンド危機」を契機として改善に向かったのです。彼は、自分に教育を与えてくれた英国に大きな恩義を感じていました。「英国の窮状を救いたい」という想いが、彼をポンド売りへと導いたのです。もしかしたら、彼は金儲けのために通貨投機を行ったと考えている人もいるかもしれませんが、決してそんなことはない。彼の行動は「プロフィット・トゥ・ヒューマニティ」と言えるものです。彼は英国政府を相手にたった一人で闘っていました。その彼がロンドンの街を歩く後ろ姿を見て、心から感動したことを覚えています。若い人たちには彼のような志を抱いてもらいたいですし、ぜひワコムにも「この世界を変える」という野望を持ってほしいですね。

井出 嬉しいと同時にとても重要な使命を感じますね。人間が何万年もこの手で握ってきた道具をさらに進化させて、ヒューメインな（人間味のある）ものにしていく。誇大妄想と言われるかもしれませんが、その覚悟があります。決して万雷の拍手で迎えられるわけではないと思いますが、ソロスさんや阿部さんを突き動かすのも、その使命なのだと思います。

阿部 ソロスさんからは、そうした気迫や気概といったものを教えてもらいました。そして日々を生き抜くセンス。サバイバル・スピリットと呼んでもいいかもしれません。ワコムはそうした期待をさせてくれる会社です。私たちは機関投資家として年間約3,000件の企業調査を行っていますが、そのように感じさせる企業はなかなかいません。

我を忘れて集中する感覚は 私たちを幸せにしてくれる

井出 敢えてお聞きしますが、ワコムへの箴言・諫言をいただけないでしょうか。

阿部 やはり小さな成功に満足してもらいたくはないですね。尊敬する経営者を見ると、「考え続ける力」が秀でています。彼らは常に同じことを考え続けている。その量が圧倒的ですね。加えて、成功している企業には色があります。センスと言い換えてもいいかもしれません。それは経営者の色でありセンスなのです。その点においては、私は井出さんに素養を感じています。

井出 小さな成功に酔いしれていないか。考える量は足りているのか。自分自身に問いかけます。

阿部 そして最後は「正しく考える」。これが大切です。成功したように見える経営者のなかには、正しく考えているとは言えない人もいます。ですが、社会はその振る舞いを見えています。ビジネスというのは人間を相手にやること。その意味で世の中はフェアですね。正しく考えている会社は、長く存続することができるでしょう。ワコムが扱うのはデジタルインクというソフトウェアではありますが、そこにはリアルがあります。そして言語の壁がない。米国中心の経済が終焉を迎えつつあると言われる今、日本の立ち位置を見極める時が来ています。



阿部修平 | Shuhei ABE

スパークス・グループ株式会社
代表取締役社長 グループCEO
スパークス・アセット・マネジメント株式会社
代表取締役社長CEO

1954年北海道札幌市生まれ。1978年上智大学経済学部卒業。1980年バブソンカレッジでMBA取得。帰国後、株式会社野村総合研究所入社。企業調査アナリストとして日本株の個別企業調査業務に従事。1982年ノムラ・セキュリティーズ・インターナショナル(ニューヨーク)に出向し、米国機関投資家向けの日本株セールス業務に従事。1985年ニューヨークでアベ・キャピタル・リサーチを設立。ジョージ・ソロス氏のクオンタムファンドなど欧米資金による日本株の投資運用・助言業務を行うとともに、欧米の個人資産家の資産運用を行う。1989年に帰国後、スパークス投資顧問(現スパークス・グループ株式会社)を設立。2001年上場。2005年ハーバード大学ビジネススクールでAMP修了。2011年政府のエネルギー・環境会議コスト等検証委員会委員、2012年需給検証委員会委員に就任。2012年国際協力銀行(JBIC)リスク・アドバイザリー委員会委員に就任。プライベートでは作詞、作曲、ギター演奏に加え、絵画も描く。



後世、その先鞭を付けた企業のひとつとしてワコムが語られる日が来るかもしれません。

井出 ありがとうございます。人間の手は無数の神経系が張り巡らされた器官です。「構造が複雑すぎるから、決してメスを入れてはいけない」という意味で、医師はかつて「ノーマンズランド (no man's land)」とも呼んだそうです。その「掌」で扱う道具をつくっている道具屋だという誇りを持ち、さらに大きな価値、体験の旅を提供するという使命感を忘れないようにします。

阿部 欧米経済は統計と数字で判断します。この40年、米国では「モノを生み出す」ということへの投資がほとんど行われず、経済の中心は消費にありました。消費財を売り、買い、捨てる。これにより繁栄してきたわけです。中国もそうなっていくでしょう。翻って日本はどうするか。誰も想像していなかったリアルな価値を生み出せば、人間はもっとクリエイティブになりますよね。クリエイティブな作業をしている時、私たちはやはり幸せを感じますから。

井出 私たちも「忘我」や「没入」という感覚について考えています。周りが見えなくなることは、生物学的生存という観点からはむしろリスクにもなります。それでも、この感覚が我々に備わっているということは、何か意味があるはずですよね。学びの時間であっても、創作の時間であっても、忘我の域と没入の空間を私たちのテクノロジーによってつくり出す。これが夢見る道具屋・ワコムが目指すものです。僕は「足るを知る」ことも大切だと思っています。半永久的で財務的な成長を是とする「資本主義の中心地」を生きる方々から見れば、

この言葉は異議を唱えられそうですが、僕の考える「足るを知る」は少し意味合いが異なります。それは「今以上の成長を諦める」「自ら限界を設定する」ということではなく、「自分たちにとって何が必要で、何を捨てるべきなのか」という問いかけであり覚悟です。真に重要な価値を見極め、そのために邁進するという姿勢が重要だと考えています。

阿部 私もそう思います。世界のトップを狙える技術を持ち、ユニークなリーダーに率いられたワコムのような企業には、簡単に「足るを知る」と言わずに、もっとアグレッシブであってほしいと願っています。まもなく、これからの30年のあり方を決めるような企業が台頭することでしょう。ワコムはそのひとつになれると思っています。今日はここに来られて本当に良かったです。ありがとうございました。

ワコムは今後30年の

あり方を決める企業のひとつになれる。